奈良大学図書館「北村信昭文庫」Ⅲ

奈良関連文学資料紹介　松村又一「大和文壇今昔」

浅田隆*

はじめに

二〇〇〇年（平成一二年）七月に北村信昭氏の遺品をご遺族のご好意によって、奈良大学図書館に受け入れた。以来図書の整理と配架は終え、遺品中の奈良にかかわる近代文学資料の整理と報告を進めている。すでに「奈良大学図書館「北村信昭文庫」北園克衛初期詩篇及び初期未発表詩稿等」（『奈良大学紀要』三四号　二〇〇六年三月）、「奈良大学図書館「北村信昭文庫」Ⅱ　北園克衛初期詩篇補遺ならびに北村宛諸氏書簡」（『奈良大学総合研究所所報』一五号　二〇〇七年三月）、ならびに『訪書月刊』（二〇〇二年一一月）にも簡単ながら報告の機会を得（「北園克衛と『大和日報』」）、北村信昭氏ならびに「北村文庫」についての概略は紹介したので、ここでは割愛する。なお本報告掲載の『奈良大学紀要』三六号と同時期に発行される予定の『奈良大学総合研究所所報』一六号に「奈良大学図書館「北村信昭文庫」Ⅳ「新しい村」奈良県支部関連資料」を掲載しているので、そちらも併せ見ていただければと思う。

本報告では、北村氏所蔵のスクラップ帖に貼付された『大和日報』文芸欄掲載の「大和文壇今昔㈠～㈦」の全文を紹介する。

「北村信昭文庫」についての報告としては以上のⅠ～Ⅳでおおむね内容を報告できたと思うが、以前にも記したように沢山の写真があり、また氏があちこちに書かれた奈良の文学や文化にかかわる紹介・回想・随想も奈良の文化史資料としての価値があり、その報告のまとめ方について苦慮している。さらに『大和日報』の消息欄・コラム「卓上噴水」等に記載されている文学関係記事なども奈良の文学情報として貴重であり、本稿の当初予定ではそれらの要点を摘記するつもりではあったが整理する時間がなく、ここでは割愛せざるを得なかった。

さて、本報告においては原文は旧字・旧仮名遣いであるが、新字・新仮名遣いに改めた。また表記法が一定しておらず、段落末に句点がなく、段落の冒頭の一時下げも原文では不統一になっており、さらに段落内の文末にはおおむね句点がなく、全体として読点のみで構成さ

平成19年９月20日受理　*文学部国文学科教授

れているなど、今日の表記法とはかなり相違するが、不用意に今日の表記法に統一することは避け、原文のとおりとした。また原文は総ルビに近いが、ルビは植字工によって適当に付けられたものと思しく[注]、著しく不都合なものもあり、ルビの存在がかえって不適当で目障りでもあるので、ルビは基本的に削除した。

松村又一「大和文壇今昔」

若い希望を胸に抱いて埋もれゆく地方文学青年の悲哀

〔注〕毎回、表題の次に二行分かち書きで右の見出しが記されている。

(一)

大正一四年六月一五日

中央の文壇とか詩壇とかから見れば吾が大和文壇などは余りに貝殻的なものであって或は殊更、大和文壇などと呼称するさえどうかと思う位である

だから、此処では、ただ吾が大和と云う一つの郷土を背景として作品を発表した人々（又は或る時代のグループ）に就いてと云った風な軽い見方の下に、座談的に筆を進めてゆきたいと思う

尤も今僕の手許に参考すべき何物もない、ほんの記憶を辿って述べるだけであるから、或は洩れ落ちになる人があるかもしれない、ただほんの或る意味での文戯的記事として見て頂けるならば筆者望外の喜びである

◇

偖、本題に立入るまでに文壇の地方分権的傾向に就いて少々意見を述べて見たい

先頃、福士幸二郎氏は地方文化パンフレットを出して、盛に此の文壇の地方分権を力説しておられるが、現在の文壇は余りに中央集権的否、専制的でありはしないか横暴的でありはしないか、それと云うも地方から実力ある作家が現れないにも依るがよしんば相当力量ある作家が生まれたとしても、悲しい哉その作品を発表すべき機関を持たず、たま〳〵同人雑誌など出してもそれを認めるだけの中央文壇に雅量がないからだと思う、かくてそれらの若い作家たちが希望の胸を抱いたまま埋もれてゆくのではないか

私はそれ等の多くの人を見た、尤もそれらの人の多くは線香花火式に何かの動機に刺激されて作品を発表した云はば本質的でない、ゼレッタントに過ぎないが、そのうちの少数の人には確実なものを把握していた人もあったように思う

そうなると今の文壇（或は創作壇）などより見ると詩壇は一歩進んでいると思う、詩壇は自由で開放的だ地方在住の詩人にして、中央詩壇に名を成している人のいかに多きかを見るがいい、その功績は詩話

会にはああ言うまでもないが、地方詩人のムーブメントがたしかに時代を動かしたものと云わねばならぬ、例えば現在奈良に設立された関西詩人協会、或は仙台北日本詩人協会、その他有力なるシンジケト(ママ)の締結を見、中には、アンソロジ風なものの刊行をさえ見るに至った

◇

惟うに、近き将来に於て、文壇の重心は詩壇に来ると断言しても憚らないだろう

話は少し外れかかったが吾大和文壇を語れば、創作などより歌壇、詩壇の方が奮って来たように思われる、それには色々理由はあろう、だが此処ではそれには言及しないで、時代的に活躍した人又は雑誌の上からその人の作品の印象さ(ママ)簡単に記述してゆくことにする

▲　大和文学と印度更紗

大和文学も印度更紗も共に大正四五年頃奈良市から発行されたもので、そこには奈良県下の若い文学青年がほとんど集まっていたように思う、当時、自然主義が文壇を風靡していた頃とて、そこに集まった人の作品（主として短歌と詩）も著しく自然主義的傾向を帯びていたようだ

その外目立った影響と云えば北原白秋一派の官態的(ママ)の匂い高き詩歌であった

大和文学は東谷渓村（目下奈良報知新聞の経営者東谷俊郎）が主宰した、印度更紗の飽までも芸術的匂い高く貴族的なのに反して、大和文学は実に地味なものであった

同人と名の付く人だけでも二三十人はあっただろう、社友はどの位あったか、雑誌と云えば三号でつぶれるのがおきまりだが、大和文学は二ケ年位発行されていたようだ、東谷君の経営的手腕がよく雑誌をして持続せしめたものと思う

筆者もその頃青二才の中学生だったが、東谷君の厄介になったものだ

今記憶にある人と云えば、木村太代次、中川宗作、中西梨花、西岡白鷗、相和翠谷、窪翠渓の諸君などだが、みなどうして了ったか昔思えば転々追懐の情に堪えないそのうち筆者一人が十年後の今日尚詩筆を捨てかねて芸術道に生命を懸けている

奈良の街を歩けば、時々、東谷君とよく出会う、彼は昔乍の彼れ(ママ)だ、なつかしい

(二)

大正一四年六月二二日

▲　印度更紗と郷土その他

印度更紗は井野丘花君が主宰したもので郷土もやはり井野君や栗林春鳥（貞一）君たちの同人機関雑誌であったように思う、共に雑誌の装填(ママ)など随分贅沢なもので芸術的匂いの高いものであった桜井の杉本久葦と云う画家がその表紙画を書いていたと記憶する

同誌には主として栗林、井野両氏が戯曲を発表した。その作品の価値

も現在から見れば頗る筋の甘いものであったがその頃としては相当に評価されたものであろう、栗林氏はその後天祐社から「浦鹽見物」及び「クーブリン傑作集」を出して大いに氏の文壇的将来を期待されたが、その後週刊朝日に翻訳の童話など発表したきりで沈黙しておった「クーブリン傑作集」の翻訳に就て兎角の噂を耳にしたがそれは同君の文名を妬む或る人達の宣伝に過ぎないと思う

現在、東京朝日新聞にあって記者生活をしているときいた、同君の文壇への復活を希望する

井野君はその後どうしたかしらない。尚同誌には詩人林信一君や歌人として盛名ある米田雄郎氏、南正胤君や矢敷翠露君などが執筆していたし原阿紗緒、三ヶ島よし子女史なども短歌を寄稿していた

同じその頃高田の大谷桃花君の手に依って「ラビリンス」が出ていた雑誌の体装（ママ）などは思い切って贅沢なものであった、一体その頃スパルヤアルス〔スバルやアルス　か？　浅田〕など北原白秋氏の雑誌の影響を受けて地方雑誌も兎も角体裁だけは実に堂々たるものであった、同誌には大谷桃花君の外柳原甚三郎氏が変名のその飽までも耽美的な短歌を発表した

その他辰巳正直という人が長編小説「若き雄作の悲しみ」を単行本として出版したが大した反響もなく葬り去られて了った。その小説の価値に就いては不幸筆者は味読の機会がなかったので云々する訳にはゆかない若き芸術の徒がその勇ましい門出に取って余りに痛ましい運命ではないか

何でも著者の序文に依ると吉野郡大滝の土倉氏が芸術家援助という名目の下にその出版費を全部引き受けられた様に記憶する、世の富豪と名のつく者この美しいエピソートを読んで何と感じるか

その当時であったと思うが中村古峡氏が心理小説「殻」を出版して大なるショックを当時の文壇に与える。中村氏を吾大和文壇の圏内に入れることは上田（ママ）小剣氏と共に少々憚るが氏もまた吾大和出身の文士である

「殻」は四五版を重ねた。その序文も中村氏と大学当時同期生であった吾評論界の第一人者生田長江氏と杉村楚人冠氏が筆を執っていた

歌人米田雄郎氏は実にこの中村古峡氏の義弟であるとは余り知られない事実である

中村氏はその後創作の筆を捨てて専心心理学の研究に没頭雑誌「変態心理」の主筆としてまた催眠術の大家として吾心理学界にありて重きをなしている

（三）

◎白日派の人々　　大正一四年七月六日

前田夕暮氏の主宰した白日社は当時の歌壇を圧するの観があり、従ってそこには若いアビッションに燃えている新人が雲の如く集まって、創作や研究を発表したものであった。その多士□（さい）々たる同社中にあっ

て、吾が大和の歌人は同社の中堅をなしていたことは今、想っても愉快この上もない

当時、米田雄郎氏は白日社の元老として押しも押されもしない地位にあり、新人として、坂口多藻津南正胤岩井清一の諸君および筆者が白熱的に作歌したものである

米田雄郎　氏の歌集「日没」はたしかに当時の歌壇にありて驚異であった、その生活は良寛僧と酷似したるものがあり、その歌風は飽までも清澄であった、橋用東声、尾山篤二郎、前田夕暮、中山雅吉、坂口保、松村又一の諸氏が批評の筆を執ったように記憶する

白日社解散後、氏は一時発表機関を女(ママ)って、迷っていたが、大正十二年頃より再び歌壇に復活して短歌雑誌にその作を発表し、目下北原白秋、前田夕暮氏と共に、「日光」の同人として歌壇に重きをなしている

坂口多藻津　君は、歌壇の新進評論家として知られ万葉や古事記の研究、上田秋成の研究その他を「詩歌」に発表して、前田夕暮氏の信任殊(ママ)に篤かったように思われた、同君の毎月「詩歌」に発表する数多くの恋愛歌は、その愛人であった君野佐保の相聞と共に、歌壇の人気を呼んだものの一つであった、同君は大阪に移転後道頓堀、カフェーバーリスターで短歌座談会を組織して、盛に後進を敬(ママ)発していたようだ、詩歌解散間際に、詩劇のようなものを発表していたが、ほんの短い一幕物であったが、傑れたものであった、あれからづーと続いて書いて行けば才気ある同君のことだから今頃は相当有名な作家になっていたと思う同君その後の沈黙はまことにほ(ママ)しい

南正胤　君は清新な感覚と柔かなリズムと、どっちかといえばムードの多い短歌を発表して、ただに白日社だけでなく、当時の歌壇での新人中の新人として、大いに期待されたものであった、若し「詩歌」が二三年継続されていたならば必ずや、南君は歌人として確実な地歩を占めていたことと思う、その後彼は口語歌に転じて、新興文学や短歌雑誌に発表していたが、勿論、詩歌時代の熱もなく勿論問題にされなかったようだ、同君は上京して一時性と愛の記者をしていたようだが、今はどうしているかしらない

岩井君はその力量程にも「詩歌」では認められなかった

その他「詩歌」に拠った人々と言えば、上田一郎、関清治、田中とし、西村富美雄君などであった

◉アララギ、国民文学、心の花

アララギには、松本楢重、西岡信蔵、滋野彦麻呂の諸君がいた、相当な力量を持ち乍ら、アララギ一流の後進圧迫的なところから、充分その芽を伸ばし切ることも出来ないで、いつしか沈黙して了った

国民文学では、水木征矢彦君が大いに気を吐いていた、同君は万葉や古事記に精通して居り、見識も高く、周囲から尊敬されていた心の花に辰巳利文君がいて竹柏会支部を奈良に設けて、なかなか一時はその社友大和だけで百名以上を数えられたが、本質的なものを持っている人は殆どなかったようだ

辰巳利文　君は心の花では相当重きをなして現今に及んでいる、同君の著としては足立源一郎小島貞三氏との共著「大和」アルス刊……

及び童謡集「釣鐘草」がある目下「奈良文化」を発行して、大和古美術研究の為、学界に尽すところが多い、同君は非常な精力家でいろんな仕事もしているが兎角評判のあるのは同君の旧友としてすこし寂しい気がする

「心の花」は辰巳君の外に、前川佐美雄君がいる、前川君は最□の詩歌壇の部に這入る可き人だがここですこし述べて置く

「心の花」を読んでいる人は勿論現下の歌壇にすこし目を通している人ならば、新人前川君の名を知らぬ人は恐らくなかろう、それ程彼は新人であり、それ程彼はすぐれた歌評家である

目下、彼は「心の花」の寵児として、石くれ氏と共に同誌の編集に参与するとか聞く、歌人として歌論家として、前川君の前途最も多望である、彼は本年東洋大学文科を卒えて郷里南葛の忍海村に帰り天理高女に教鞭を執るとか聞いたが、どうしたかその後の消息に接しない

以上の外惑星としての人に荻は穣(ママ)君がいる、荻田君は坂口保、松本楢重君たちと曾て、こもりぬ短歌会を組織して、盛に、作を発表した、彼はその後松本君達と共に「土塊」を発刊して創作を発表したこともあり、藤田広介（木原書店主）君と共に、『崩岸の上に』を発刊したこともある、太田水穂氏の主宰する「潮音」にもその作を一時発表して相当認められていたようだ

その外木村太代次君が「珊瑚礁」社にありてその作を発表していた相当名のある人たちと云えば以上に挙げた人達であるが、この外には筆者の目の届かない所に意外な人があったかもしれない

前川君を除いて、これでざっと大正十年前の吾大和文壇の人に達(ママ)就ては言い尽したようだ

以下は最近の人達に就て、詳細に書いてゆきたいと思う、次回は、藤原徳次郎氏達の、奈良文芸研究会発行の「未墾地」に就いて稿を埋めたいと思っている

（四）

大正一四年七月一三日

未墾地時代

一時隆盛を極めた吾大和歌壇も雑誌詩歌が我と我家に火を放って解散して以来その発表機関を一時失って次第に沈潜状態に落ちていった、その頃私は既に歌壇に或る見切りをつけて盛に詩と戯曲を書いていた（戯曲は都合で発表しなかったが）当時詩壇はデモクラシーの勃興を見白鳥省吾福田正夫百田宗治の諸氏が詩壇戦線の第一線に立って作に評論に火花を散らして民衆詩とその民衆精神のムーヴメントの為に戦っていた、私もその民衆詩人の一人として農民プロレタリアの一人として盛に田園詩を発表し一時百田宗治氏と共に「地上の翼」を発行したがそのうちに五三連隊に召されて一兵卒としての生活を送るようになりシベリヤへ出征することになった、私はその後短歌と詩を橋田東声氏の覇平樹に発表して僅に芸術欲の満足を充していたが吾大和文壇が

如何に動きつつあるか将た又如何なる新人が飛躍しているかどんな雑誌がそれらの人々に依って計画されているかが知る由もなかった

これは私が帰国後聞いたのであるが奈良市からその当時初期の「未墾地」が発行されていたのであった、何でも青江秋月君や山村素一君たちがやっていたようだが大して反響もなく解散して了った、私が此処で「未墾地時代」として起稿したのはその第二期のそれに就いてである

第二期の「未墾地」は藤原徳二郎、高橋義一、吉田徳義、佐伯孝夫氏が中心になって努力した

藤原徳二郎君はその頃十八九歳の紅顔の青少年であったが彼の物なる創作や評論は確に彼の凡庸でないことを示していた

彼は評論として「文芸と社会精神」を創作として「強迫された少年」「或る夜の出来事」「或る肺病患者の手記」を発表した「或る肺病患者」の手記等は未完成なものであったが息つまる位の圧迫と感動を受けたことを今でも僕は覚えている藤原君はその後「日報」の記者としてのかたわら多くの文芸評論と社会政治評論を書いて若き文明批評家として一方に於て重きをなしている彼は「日報文芸版」の設立や「雲」及び「関西詩人協会」の設立に尽す所多く大和文壇の啓発に並々ならは功献をしてきたことを特記してもいい、彼は東都文壇に多くの知己を持ち将来大に飛躍の余地がある社会的視点からの著書は相当大きな反響があった彼はまだ若い彼の精神は常に青い翼そのものである

高橋義一　君はその頃椿貞二の名に於て創作を発表した「雲」という短編等は殊によかったようだ、彼はその熱帯的風な感覚一方の詩を書いた彼の詩は晦渋なことで有名で、誰も彼の詩がわからくと批難したが彼が最近「雲」及び「関西詩人」に発表する詩は稍平明になってきたが彼れ独特な熱帯風的感覚主義のシルエットがつき纏っているようだ、詩壇に新感覚派の提唱を見ている今日彼れの詩は稍古い感覚に出発しているようだ

「未墾地」の付属事業としての「奈良文芸研究会」に就いてや「関西詩人協会」の設立やに就て同君の尽すところまことに多い、余り表面に立つことを好まないが内部にありて彼れは芸術運動の有力なる後援者であることは感謝に堪えない

佐伯孝夫　君は当時君の父が奈良郵便局長であった関係から「未墾地」にその作を発表していた彼は可成り長い創作を察表したが甘い長いものであったというだけで別に誰にも問題にされなかったが彼の本質は創作よりも寧ろ詩にあったようだ

彼は上京後早稲田の仏文科の学生であった関係上西條八十に師事してその詩作を「白孔雀」に発表した「白孔雀」廃刊後「棕櫚の葉」の同人として序情小曲風な技巧の勝った詩を発表している彼は昨年あたり日報紙に詩及びブロックの訳詩などを発表した

吉田徳義君　吉田君も余り表面に立たなかったが可成り吾大和文壇の為に努力した人である彼は多く詩作を発表した彼の詩はしづかでどこか宗教的な句をもっていた彼の近頃書く詩はどこか民衆詩人とて有名なアメリカのホーレス、トラウトルによく似てあると思う、彼れは

静的でいつも落ちついて悠々とある時流を眺めて歩いてゆく人だ、だが欲を云えばもうすこし熱があってほしい、元気であってほしい、引止め思案を彼のために私は取らないところだ、以上の外五條の古平萬亀子女史が歌を発表していた

古平まき子　女史の短歌は「未墾地」では白眉であった去年あたり「少女星」に少女小説を連載していたようだ女流歌人の乏しい吾大和文壇のために女史の奮起を望むその他水野準三、西本紀一、浅野たかさ、丹沢吉男、青江秋月の諸君が同誌上で活動した

同社同人以外の寄稿家として竹尾ちよ女史及び私が短歌と詩を寄稿したにすぎない雑誌「未墾地」は三号にして不幸廃刊を見たが「奈良文芸研究会」の事業は継続されてきた公会堂で音楽界を開催したこともあり一昨年春文芸詩歌講演会を開催して遠く東都文壇より福士幸二郎、福田正夫、百田宗治、佐藤惣之助氏を招いて師の運動のため大いに尽した

それかあらぬかその後吾大和文壇は一層の活気を見るやうになり新人の輩出を見るようになったことは喜びに堪えない兎も角奈良文芸研究会は吾大和文壇の桂冠団体であらねばならぬ

（五）

大正一四年八月二四日

雑誌「未墾地」と同じ頃出ていた雑誌に萩田穣君達の「土塊」青江秋月君の「ヴィナス」金尾兼勝君の「流星」中島浪路君達の「新星」中川抱夢君の「白い花」等があった。

「土塊」は主として、萩田君と松本君の創作発表の機関であった。萩田君も松本君も既に歌人としても一家をなしていた人だけに、その発表する創作小説や散文には見るべきものが少なくなかった。殊に、萩田君の書く短いものに、何とも言えない味なものがあった

青江君の「ヴィナス」は詩歌中心のものであったが、余りにセンチメンタルな、甘いものばかりで、どっちかと言えば、女子供によろこばれる底のものであった

金尾兼勝君の「流星」は真贅（ママ）な詩専門の個人雑誌で、大阪の詩人瀬田彌太郎氏と二人きりのしんみりと落付いたいい雑誌で少しは中央詩壇から問題にされていたが、いつかしらその題名のように消え去ったことは残念であった

中川抱夢君達の「白い花」は最近まで書店の店頭にその瀟洒たる姿を見せていたが、どうやら廃刊したらしい噂を耳にしたが、本当だとすればさみしい限りだ

「白い花」には、女流の歌人や詩人たちが集まっていたようだ、木滑節子という人の短歌などは中々傑れていたと思う。この一派の人達の作風は、どっちかと云えば、非常に感情的で異国的で夢の中なる恋人に憧憬れて逍遥うてゆく底の甘やかされた感情に充ちたものであったが、今日の歌壇のようにああまで鯱鉾張った中にあって、こうした雑誌の一つ位あってもいいと思われた。（但し沢山あってはまた退屈す

るが）

「白い花」では、その編集者である中川白葉、中川抱夢の兄弟、木滑節子の作品が一番光彩を放っていたようだ

「白い花」は別の仕事として、音楽上のいろ〳〵な仕事をした。ハーモニカ、ソザイティを組織してその演奏会を時々開催したなどとこの社のために特記して置く

「新星」は中島浪路君達の作品発表の機関雑誌であったが余り投書家気分が鼻につきすぎたが（それは作品よりか雑誌の体装ものた）そこに集まった人達の意気は愛すべきものがあった、ただああした多くの文学愛好の青年が一つの集団をなして、文学雑誌の一つでも出したという所に、近時、地方青年の文学に対する一つの心の動きが見られて、非常に頼母しい気がした「新星」は二号が三号で廃刊して了った

大和日報文芸欄の人々

大和日報はその前身「新大和」時代から、文芸に対して特別の紙面を割き、大に大和文壇開拓の為に尽してきたので、我等のグループでは「新大和」を目して、文芸新聞といっていた時代さえあった

ところが、奈良文芸研究会の幹部であった藤原徳次郎君が入社後、間もなく「新大和」は「大和日報」と改題して大に勢力を拡大し紙面の刷新を計り、殊に文芸の為に、文芸版を設けて、大和文壇啓発の為に尽すところとなった

先ず藤原君がその編集を担当し、米田雄郎氏及び不肖僕が中心となって、地方新聞にしては珍しい充実したものであった。毎版東都文壇知名の士の執筆の外、若いアビッションに燃えている人達の発品が発表された

橋本健吉君はその尤もなるもので彼は日報文芸版から、中央へ送った一人である。彼は目下、エポック社にありて、「ゲヱギムギム、プルルルギガム、ギム」詩派の新しい試を以て、退屈なる現詩壇に新しい詩境を開拓せんとしている彼の今後の活躍を約束してもいいと思う

その他、農民詩を一度しか見せなかったが、吉野北山の野長瀬正夫君がある。彼はまだ二十歳の青年だ相だが、彼の書く詩を見て僕は驚いた。すばらしいものだ。未完成の大きな未来ある詩人として、彼を有することは僕にとって大きなたのしみだ

北村秋芭君も吉田龍太郎も共に、日報文芸版を通じて、知ったのであるが、二人共また地に播かれたばかりの種子にすぎないが、いい未来を今から約束して僕は失望しない確なものを見ている。（二人については関西詩人の人々に就いて書く）

民謡童謡の作家として、平野千史夫君は一頭地を抜いていた。その着眼さの確さに於て、そのリズムの軽さに於て、ただ遺憾なのは、先進（北原日秋や野口雨情）の影響が目立つことだ。この人にしてどこまでも独創的であったならば、そして、もうすこし、ケースが大きかったならばと、彼は残念に思うのである

津山武雄君の詩も非常に素朴で、力強いものがあった、すこし多作すぎはしまいかと思う点もあったその他松下輝一君の詩に特異性があった。和歌の方も中々賑かだった、萩森君子女央や、水原青浪君辻本正

則、染井清達君の短歌が頭に残っている、藤原徳二郎君の評論、「短歌の悲観的将来」に対する玉崎虚光君の反駁文などは第一期の日報文芸版に於ける、特記すべきものの一つであろう。藤原君は玉崎君の反駁に対する反駁を書くと言っていたが福岡へ転勤になり反駁文も有耶無耶になって了ったが、大和日報文芸版は、文学青年以外にも多く愛読者をもち、あたかも大和文壇王国をなすの観があった

（六）

大正一四年九月七日

雲に拠れる新人・・・・・・その他

此の稿をはじめてから、私の身辺にいろ〳〵な事故があって、それが為、諸君の期待を裏切った、甚だ心苦しいと思っています

実は只今も一週間ばかりの和歌山方面へ旅控えて忽忙のうちに、しめ切りに間に合すべく、執筆した様な訳で、遺憾な点はありますが、いづれ何かの機会を見て、補筆してわきますから、悪からず思って頂きたい

「雲」は私や藤原徳二郎君が中心となってやった雑誌だけに、そこに集って人達について兎角の言をなすどうかり思うが、此処では仲間という立場を離れた第三者から見て、その人達の作風に筆を及ぼしてゆこう

「□」を計画したのは東都震災があって間もない時で、評論家福士幸次郎氏が着のみ着のまま住吉の佐藤紅緑氏の別邸へ避難してきていたのを慰問の帰途、上田一郎君と二人□、二人だけの同人雑誌として発行すべく相談したのであったこんなことはまあどろでもいいとして、さていよ〳〵二人でやる□であったが追々同志が殖えて、十人近くの同志が集まることになった

あの震災の為、それ以前まではさしも横暴を極めていた中央文壇が（広く都会文化□）一時的にも崩壊して、その中央集権から地方分散的傾向を帯びてきた頃とて、時期を覗っていた地方の若き人々は一斉に旗をあげた、私達もそれであった

「□〔雲か？浅田〕」は大正十二年十一月より大正十三年六月まで発行されたが、そのムーグメントを大きくするため和歌山の「抽象」とのシンジケートして、新しい意気込みを以て「関西詩人協会」の設立を見た、その運動は相当なエフェクトを納め、同人の一人、坂中正夫君は尨大なる詩集「六月は羽博く」を引っ提て上京し、「掃情詩社」より出版して一躍新進詩人としての確な地位を占めた、最初の委員は、藤原徳二郎、西川村之助、上田一郎、酒井良夫、阪中正夫、柳沢□、辻村秋芭、北村秋芭、高橋義一、橋本健吉、杉本又一の十一氏であった、その内、藤原、阪中、僕が実行委員として、一切の庶務を担当することになった

同人のうち藤原、高橋、橋本の諸君に就いて、すでに書いたから此処

では省略して、以外の人達に就いてすこし書いてみよう

上田一郎君

上田君は、大和文壇でも相当古顔な人ですでに大正五六年頃、「誌歌」誌上に現れていたようだ、その後、南正汽君の『榛摺短歌会』にも書いていた

その後、彼は余り花々しい飛躍を見せなかったが「雲」が創刊され、大和日報の文芸欄が設置されてから、相当すぐれた作品を発表した殊に、日報紙に発表した小説「瓦」一篇は、その材料を支那にとり、彼独自の空想を描がいたところ、彼でなくてはならぬ或ものを思わせた

彼は詩を発表したが、彼の詩はセンチメンタルでなければ、抽象的なもので余りいい作品を示さなかった、むしろ、散文の方に傑れたものがあった、「海」や「潮騒」などが殊によかった、が近来、が熱褪めかけて埋もれゆかんとしつつあるは、まことに惜しい奮起を望む

西川林之助君

西川君は歌人として、詩人として大和では相当、ポピュラな人である外に、巨万の財を後盾としてその方面にも重きをなしている

彼には歌集「紫陽花」詩集「見のこした夢」がある、出版当時、すでに本紙上で読後感を発表した筈だから重複をさけることにする

酒井良夫君

酒井君はすばらしい情熱の飛躍を見せる人だ「写真と文芸」を主宰したことがある、百ページに近い堂々たるものであったが三号か四号で廃刊したのは、まことにほしいと思った

彼には近く、東京〇情詩社から、発行され□「蒼空」一巻の歌集の外に酒井良夫民謡集がある、その他「コドモ朝日」に数多くの童謡の発表を見すべに童謡作家として広く認められつつある、子供達の間には案外、彼はポピュラである

彼は最近童話を書いている、どん〳〵いいものを書いてほしいと思う

（七）

大正一四年九月二一日

未来ある新詩人達

未来ある新詩人として、私はすでに、吉野下北山村の野長瀬正夫君の名を挙げた。野長瀬君の以外に私の期待しつつある人の名を挙ぐれば、先ず関西詩人の北村秋芭、吉田龍太郎、宮尾賢治郎の諸君及純詩人の熊谷直臣、秋田房樹、米沢路郎の諸君である

北村秋芭君

北村君は詩を書きかけてから日尚浅いに拘らず、異常な進展を見せている。昨年はじめて彼の詩に接した頃彼の詩境は甚だ幼稚なものであっただが、彼の幼稚な詩にも彼の強い芽がかくされていた、その後その芽はぐん〳〵とよい伸張を見せてきたことはうれしい限りである

彼の詩はどこまでも純情で温雅である。彼はつつましい心を傾けて、ひとり静かに歌う詩人である「静かなる情熱家」「もの寂た青銅の釣

鐘」僕は、彼の近来の詩をよめば妙に、青銅の釣鐘のものしずかなる感情を、感じる。「暮春」という詩は彼の最近の佳作であろうその第一聯で彼は次のように歌っている

べにさし指のつめの中に
ぽっちりと白い星がある

彼はまたその第四聯で

淡いかなしみや
よろこびを織りまぜた短いライフにいくたびか
ひかりあらわれ消えていった
夢のように悲しい星である

ある運命的な人生のさみしさの中に、彼はその星によびかけて、涙ぐむ純情詩人である

吉田龍太郎君

北村君の純情さはないが、人生の見方に於て、その表現上の手法に於て、たしかに彼はすぐれたものをもっている。詩のうま味を彼は持っているこの点では新人達のうちでも吉田君の右に出るものがあるまいと思う「生活二景」という詩はいいものであった

宮尾賢次郎君

宮尾君はあまり詩作を見せない「ある憂鬱なる風景」は力強いタッチを見せていた。彼は画と彫刻に没頭しているが、詩作上の手腕も並々ならぬものがある

純詩人の一派

純詩人は「創生」の後身とでもいいたい「創生」に就ては詳しく知らないが米沢熊谷二君はその同人であったように思う

「純詩人」は二君の外に秋田房樹君を加えて三君が中心勢力となって詩のムーヴメントのために気勢を挙げていることは頼母しい

熊谷直達君

熊谷君の作品に余り接しないが詩よりも、短歌の方にすきなものがあった。彼には二度きりしか会ってないが、彼から受けた感じは非常にこのもしいものであった。彼の近来の詩についてもすこし書いてみたいが、「純詩人」及「あし音」共に、この移転騒ぎに紛失したので、遺憾乍ら書くことが出来ない。何かの機会に書くことを約束しよう

秋田房樹君

同君に就ても熊谷君に対して云ったと同じ言葉を繰り返すにすぎないから機会を見て書きたい、ともあれ、秋田、熊谷二君は、北村、吉田君達と共に、新しい大和を揺籠として、文壇へ出発せんとしつつある力ある新人として期待されている、条沢二郎君に就ては、去年のし(ママ)壇の月評で一度書いたから今回は省く

清水信君と金沢種美君

清水信君は奈良にあって口語歌雑誌「郷愁」を主宰し、金沢君は、五條在に会って「潮光」を編集しつつある共に地方短歌雑誌の大立者である

清水君は口語歌運動の日本に於ける草分時代の功労者の一人である。

彼は評論に作歌にすばらしい精進さを見せている

彼の著書としては、「児の素描」「匂やかな秋」「黎明」等がある。いづれ、近いうちに「黎明」の読後感を本紙上で書く積りである

金沢種美君はすでに古くから相当有名な歌人である「潮光」を編輯して関西歌壇に重きをなしているさて大和文壇今昔も意外なものになった。振返って見てへんに恥しい。この記事はこれで閉じて近く「抒事詩とコント文学」に就いて、すこし書いてみたいと思う

ついでに、紙面を借りて――私は今度移転をいたしました。京都府木津町奈良水道水源地横、一本松、松村又一私宛の書信、原稿は以後こちらに願います

注

余談に類することながら、松村の「大和文壇今昔」を見ていて、当時の地方紙の印刷状況、というより印字における活字使用状況をあれこれ忖度することとなった。少し例示すると、「甘い長いものであったというだけで別に誰にも問題にされなかった」という説明部分。同じようなケースは「余りにセンチメンタルな、甘いものばかりで、どっちかと言えば、女子供に喜ばれる」などが見える。どうも文脈がねじれてくるように思われる。しかし「甘い」が「甘い」であれば問題はない。ルビによって評価が逆転してしまっているわけだ。「古平満亀子女子」のルビにいたってはあまりにも幼稚であろう。語彙量の貧弱な植字工が地方新聞には多くて、言葉を知らずに適当にルビを振ったのかと思ったりすることになる。しかし実は当該部分の次の行では「女史」とルビが振られており、単なる不注意かやる気がない結果だろうかと思ったりもすることになる。他にも「萩森君子女央」というのが見える。「萩森君子女史」であるべきところだろう、噴飯ものと言わざるを得ない。さらに「後盾」「仲間」「草分時代の功労者」なども見える。「うしろだて」「なかま」「くさわけ」とあるべきところである。原稿の筆者はさぞやりきれなかったことだろう。

目障りなルビについて種々思い描きつつ作業をしていて気づいたことだが、「百田宗治氏」の「氏」の活字が完全に上下転倒し、さらに上下転倒した文字のルビが左側に来ている例に出会った。どうもこれはルビ付活字の結果によるものではないかと思いついた。つまり、地方新聞社のルビ別活字の在庫数（所有数）に限界があり、読みの異なる漢字をやむなく使用するケースがあったのではないだろうかということである。右の「宗治」もまたしかりである。

とは言え、右は印刷技術史に暗い筆者の憶測に過ぎないが。

Introduction of the report " Nara's literary world in 1920's" written by Mataichi Matsumura

Takashi Asada

This is the introduction about the report, which Mataichi Matsumura, poet from Nara prefecture wrote about the situation of Literature in Nara prefecture at the local newspaper in Nara prefecture "Yamato-Nippou". The report was serialized seven times from 15th of Jun. to 21st of Sep. in 1925.